



2009年10月15日発行（隔月刊）



# う 羽 化 か

ISSN1880-8646  
2009年10月  
第76号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会  
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290  
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣  
編集責任者 木 下 和 久

思い出の多い花です



## 目 次

漢点字の散歩（15）（岡田健嗣）	1
点字から識字までの距離（72）（山内 薫）	8
大滝まさおブログより	11
東京漢点字例会報告とわたくしごと（木村多恵子）	12
東京漢点字学習会報告（中田利夫・木村多恵子）	17
ご報告とご案内	19
漢点字訳書紹介	20
漢文のページ	23
漢点字講習用テキスト（初級編・第17回）	26
編集後記（木下和久）	27

# 漢点字の散歩 (十五)

岡田 健嗣

## 五 点字



本稿では、「へ点字」をご存じない皆様も、点字をパターンとしてお受け止めただければ充分です。点字で何が書かれているかを読み取る必要はありません。

## 2 ドイツ語点字 (3)

\* 本稿では、ドイツ語の点字表記をご紹介しますのだが、ドイツ語の表記について、二つの約束事を決めておきたい。一つは、「b・o・n」のウムラウト(変音)である。通常タイプライターではeを後置して表すので、ここでもそれに倣う。従って「ae・ae・oe・ue」という表記になる。またドイツ語では「sz」を一字で表すが、通常タイプライターでは「B」を代用して当てる。しかし本稿では本来の「B」との混同を避けるために、「β」を使用する。従って「β」が現れたときは「s」と読み替えていただきたい。

前回は、ドイツ語点字の略字のうち、最も基本的な「音節略字」と、語頭部のみに使用される「前綴り略字」をご紹介した。

ドイツ語では、単語の語頭部の綴りを「前綴り」、語幹部を「中綴り」、語尾部を「後綴り」と呼ぶ。音節略字は単語のどの位置にも用いられるが、語頭部、あるいは語尾部にのみ用いられる略字がある。これらは「前綴り略字」、「後綴り略字」と呼ばれるが、ドイツ語点字ではこれ以降、一つの点字符号の重用が認められる。(前回の拙文をご参照下さい。)

### ⑤ 後綴り略字

ドイツ語には、格変化語尾や活用語尾の他に、数多くの語尾がある。これらを一括して「後綴り」と呼ぶ。ドイツ語点字では、この後綴りを略字化して、「後綴り略字」として用いる。これは三つのグループに分けられる。(綴り、略字、事例の順)

後綴り略字グループ一

haft hf gl:bhf(glaubhaft) t:lhf:(teihaf  
tig)  
heit h :h(einheit) :hc(einheiten) fr:h  
(freiheit)fr:h:hsdr:g(freiheitsdrang)  
keit k fr:d:k(freudigkeit) :h:k(einheit



## ルイ・ブライユの点字表

1 :	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10		
	Aa	Bb	Cc	Dd	Ee	Ff	Gg	Hh	Ii	Jj	Upper4	
2 :	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	+ 11	
	Kk	Ll	Mm	Nn	Oo	Pp	Qq	Rr	Ss	Tt		
3 :	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	+ 11	
	Uu	Vv	Xx	Yy	Zz	ge	es	em	β	st		
4 :	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	+ 11	
	au	eu	ei	ch	sch	ein	er	ue	oe	Ww		
5 :	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	Lower4	
	,	;	:	un	or	an	eh	te	in	ar		
6 :	51	52	53	54	55	56						
	aeu	ie	ich	ae	des	im						
7 :	57	58	59	60	61	62	63					
		ig	lich		ck	ach						

ickheit) lu:b:kc (Lustbarkeiten)  
 nis x :bx (ergebnis) :h:mxse  
 (geheimnisse) :bxlos:k (ergebnislos  
 igkeit)  
 sam : : (einsam) :c (verein  
 samen) gr:k (grausamkeit)  
 schaft : b:rg: (buergschaft) k:  
 d:c (kundschaften) b:rg:s: (buergs  
 chaftsschein)  
 ung u f:u (forschung) f:d:uc  
 (forderungen) f:us:bxse (forschun  
 gsergebnisse)  
 後綴り略字のグループは、使用に制限  
 がない。自在に語幹に接続したり、略字と  
 略字を接続したりする事ができる。  
 後綴り略字グループニ  
 falls f k:f (keinesfalls) ebcf  
 (ebenfalls)  
 mal m :m (einmal) dr:m (dreimal)  
 waerts w abw (abwaerts) :w (einwaer-  
 rts)  
 l:d:w (landeinwaerts)

後綴り略字のグループ二は、その後ろに綴りを続けることはできない。その場合は略字を解消しなければならぬ。"m"は、"m:"として語尾"malig"、"ms"として語尾"mals"と用いることができる。また"formal, normal, dezimal"には、"m"を使用できず、綴り字通りに書かれなければならない。(詳細は解説書参照。)

後綴り略字グループ三

ation  $\text{m} \cdot \text{n} \text{ n} \cdot \text{n}$  (Nation)  $\text{r} \cdot \text{n} \cdot \text{al}$  (rational)  
 ativ  $\text{v} \text{ ry} \cdot \text{v}$  (relativ)  $\text{sup} \cdot \text{l} \cdot \text{ve}$  (superlativ)  
 ismus  $\text{i} \text{ hum} \cdot \text{i}$  (humanismus)  $\text{g} \cdot \text{i}$  (organismus)  
 istisch  $\text{hum} \cdot \text{i}$  (humanistisch)  $\text{tru}$   
 itaet  $\text{iv} \cdot \text{s}$  (universitaet)  $\text{n} \cdot \text{tr}$   
 ion  $\text{j} \text{ pcsj}$  (pension)  $\text{j}$  (union)  $\text{sektj}$   
 (sektionen)

後綴り略字のグループ三は、外来語の語尾として用いられる。後ろに語尾や他の語が接続することもできる。

後綴りは、ドイツ語にとって、語の性格を決める大きな要素である。"haft, sam"は形容詞を、"heit, keit, nis, schaft, ung"は動詞の語幹についてたり名詞に付いたりして、女性名詞を作る語尾である。またそれぞれに接続する語や語幹、語尾にも選択制がある。グループ一の略字はその意味で、ドイツ語元来の原則に従って使用することができるし、グループ三の略字も、同様に用いられる。

## ⑥ 一マス略字

「一マス略字」とは、単語あるいは語幹を一マスで表す略字である。一マスの点字符号で表されるのは、アルファベット、拡張アルファベット、文章記号に加えて、音節略字であった。先の「前綴り略字と「後綴り略字」の項でご紹介したように、さらに一つの点字符号を、多重化して使用することになる。

ドイツ語の単語には、語尾や他の語との接続は全く独立して用いられるものと、語尾を取ったり他の語と接続するものとに大別できる。その数は後者が圧倒的に多いが、文章中では要所要所を前者が占めるのである。そこで一マス略字は、三つのグループに分けて使用される。

点字符号、単語の順にご紹介する。

一 マス略字グループ一

c sich, d das, e den, j jetzt, k kann,  
 l laeβt, m man, o oder, r der, s sie,  
 w was, daβ, ist, als, schon,  
 um, ihm, des, im, auch,  
 die, ich

以上の二二個の点字符号が、グループ一の一マス略字である。これらは前述の通り、語尾変化や他の語との接続がない。従ってこれらの後ろに続くのは、句読符号や文章符号に限られる。

一 マス略字グループ二

a aber, b bei, f fuer, g gegen, n nicht,  
 p so, q voll, t mit, u und, v von, x  
 immer, z zu, gewesen, dem, auf,  
 wie, durch, ueber, unter,  
 vor, mehr, war

以上の二二個の点字符号が、グループ二の一マス略字である。これらは単独に単語として用いられるとともに、分離動詞やその他の複合語の要素ともなる。その場合、これらの点字符号が一マス略字であることが、触読者に知らなければならない。そこで、その

点字符号が一マス略字であることを宣言する符号である「告知符号(二一の点)(Akp.)」(Ankuendigungspunkt)が前置される。告知符号(Akp.)は「このグループ二の一マス略字と他の文字や略字とを区別するために用いられる符号であるので、グループ二の略字が複合語の先頭と二つ目に続けて配置される場合は、先頭の略字に前置される必要はない。ただし一マス略字が先頭から二つ並ぶ場合でも、<sup>1</sup>mehr<sup>2</sup>·<sup>3</sup>unter<sup>4</sup>」の二つの略字が先頭にあるときは、句読符号などの混同を避けるために、この告知符号(Akp. 二一の点)を前置する。例：

<sup>1</sup>fs<sup>2</sup>·<sup>3</sup>(Fuersorge) <sup>4</sup>b<sup>5</sup>·<sup>6</sup>c<sup>7</sup>(beistehen) <sup>8</sup>pgar(sogar) <sup>9</sup>tt<sup>10</sup>·<sup>11</sup>lc(mitteilen) h<sup>12</sup>·<sup>13</sup>g<sup>14</sup>(hindurch) h<sup>15</sup>·<sup>16</sup>g<sup>17</sup>(herueber) <sup>18</sup>g<sup>19</sup>(entgegen) <sup>20</sup>g<sup>21</sup>·<sup>22</sup>lc(entgegeneilen) <sup>23</sup>nu<sup>24</sup>(vernichtung) t<sup>25</sup>·<sup>26</sup>zt<sup>27</sup>·<sup>28</sup>lc(mitzuteilen) p<sup>29</sup>·<sup>30</sup>dem<sup>31</sup>(sowie) z<sup>32</sup>·<sup>33</sup>dem<sup>34</sup>(zudem) b<sup>35</sup>·<sup>36</sup>z<sup>37</sup>·<sup>38</sup>c<sup>39</sup>(beizustehen) <sup>40</sup>h<sup>41</sup>(mehrheit) <sup>42</sup>ms<sup>43</sup>(mehrmales) <sup>44</sup>w<sup>45</sup>·<sup>46</sup>d<sup>47</sup>(mehraufwand) <sup>48</sup>zt<sup>49</sup>·<sup>50</sup>c<sup>51</sup>(unterzutauchen) <sup>52</sup>dnu<sup>53</sup>(unterordnung) <sup>54</sup>dnu<sup>55</sup>(unordnung) <sup>56</sup>gedet<sup>57</sup>(unvollendet) <sup>58</sup>her<sup>59</sup>(vother)

単語“q(voll)”<sup>60</sup>“w”(war)”は、しばしば変音(umlau

とする。この場合は、「変音符号 (五の点)」を前置して表す。例：

q (voellig)    qe (uebervoelle)    e (waere)  
c (waeren)

### 一 マス略字グループ三

h hatt, haett, i ihr, y welch, sein

以上の五つの点字符号が、グループ三の一マス略字である。これらはそのまま格変化語尾や活用語尾を取ることができ。例：

he(hatte), hc(hatten), he(hattest), e(haett  
e), c(haetten), e(haettest), ie(ihre), i  
(ihrem), i(ihres), ye(welche), y(welcher)  
y(welches), e(seine), c(seinen), (sein  
es)

以上一マスで単語と語幹を表す略字を三つのグループに分けてご紹介したが、ドイツ語の特徴である格変化とそれに伴う活用を略字で表すには、これだけでは如何にも少ない。ここで言うグループ三と同様の働きをする略字が、さらに必要と考えられた。

### ⑦ コンマ略字と語幹略字

#### a. コンマ略字

一マス略字のグループ一は、単独の単語を表す点字符号である。グループ二は、複合語の要素となる単語を表す点字符号である。グループ三は、格変化語尾や活用語尾を伴う語幹略字である。グループ二が複合語の要素となる場合、一マス略字であることを予め示しておく必要がある。そこで「告知符号 (Akp. 二の点)」が前置される。

以下にご紹介する略字は、一マス略字のグループ一と三、そして単語でもある音節略字の幾つかに、「告知符号 (Akp. 二の点)」を前置するものである。これらは全てグループ三と同様に、格変化語尾や活用語尾を伴う「語幹略字」である。「一マス略字グループ一」と、しっかり区別される必要がある。そこで前置される点字符号 (二の点) が「コンマ」と同じ符号であるところから、この略字は「コンマ略字」と呼ばれる。以下のご紹介では、同じ点字符号の一マス略字と比較できるように、括弧内に一マス略字も示した。

コンマ略字 (括弧内は、一マス略字)

d duerf(d das), e setz(e den), h hab  
(h hatt), i sitz(i ihr), k koenn(k kann),  
l laß(l lass), m mueß(m

man), 𐀓𐀔𐀕 wolle(oder), 𐀓𐀔𐀕 fahr(der),  
 𐀓𐀔𐀕 soll(sie), 𐀓𐀔𐀕 werd(was), 𐀓𐀔𐀕 stell  
 (y welch), 𐀓𐀔𐀕 sprech(𐀓𐀔𐀕 daβ), 𐀓𐀔𐀕 stand  
 (𐀓𐀔𐀕 ist), 𐀓𐀔𐀕 weis(𐀓𐀔𐀕 als), 𐀓𐀔𐀕 schrieb  
 (𐀓𐀔𐀕 schon), 𐀓𐀔𐀕 einander(𐀓𐀔𐀕 ein), 𐀓𐀔𐀕 ander  
 (𐀓𐀔𐀕 er), 𐀓𐀔𐀕 moeg(𐀓𐀔𐀕 sein), 𐀓𐀔𐀕 brauch(𐀓𐀔𐀕  
 auch), 𐀓𐀔𐀕 spiel(𐀓𐀔𐀕 die), 𐀓𐀔𐀕 richt(𐀓𐀔𐀕  
 ich), 𐀓𐀔𐀕 interess(𐀓𐀔𐀕 in)

以上の二三個の点字符号が、コンマ略字である。この中の幾つかは、母音が変音(ウムラウト)する。その場合、一マス略字のグループ三に做って、𐀓𐀔𐀕(二の点)の代わりに𐀓𐀔𐀕(五の点)を前置して表す。

### 変音コンマ略字

𐀓𐀔𐀕 l laeβ・laess, 𐀓𐀔𐀕 r faehr, 𐀓𐀔𐀕 staend,  
 𐀓𐀔𐀕 aender, 𐀓𐀔𐀕 braeuch

これらのコンマ略字は語幹略字であるので、格変化語尾、あるいは活用語尾が接続される。またこれらは複合語も作る。そんな場合は、一マス略字のグループ二の原則に沿って扱われる。例：

𐀓𐀔𐀕 ec(setzen), 𐀓𐀔𐀕 it(sitzt), 𐀓𐀔𐀕 k𐀓𐀔𐀕(koennte), 𐀓𐀔𐀕 dtc(duerften), 𐀓𐀔𐀕 cd(spielend), 𐀓𐀔𐀕 t(brauch

t), 𐀓𐀔𐀕 yc(bestellen), 𐀓𐀔𐀕 anstand), 𐀓𐀔𐀕  
 𐀓𐀔𐀕 c(Versprechen), 𐀓𐀔𐀕 c(ausrichten), 𐀓𐀔𐀕 dx(bed  
 𐀓𐀔𐀕 nerfnis), 𐀓𐀔𐀕 itum(besitztum), 𐀓𐀔𐀕 verbrauch  
 her), 𐀓𐀔𐀕 ru(erfahrung), 𐀓𐀔𐀕 weg𐀓𐀔𐀕 g(werdegang),

𐀓𐀔𐀕 plan(spielplan), 𐀓𐀔𐀕 r𐀓𐀔𐀕(gefaehrte), 𐀓𐀔𐀕  
 𐀓𐀔𐀕 (bestaendig), 𐀓𐀔𐀕 (gebraeuchloch), 𐀓𐀔𐀕 u  
 c(veraenderungen), 𐀓𐀔𐀕 (gegenstand), b𐀓𐀔𐀕 yc beis  
 tellen), t𐀓𐀔𐀕 (miteinander), 𐀓𐀔𐀕 rc(durchfahre  
 n), 𐀓𐀔𐀕 c(unterschrieben), 𐀓𐀔𐀕 v𐀓𐀔𐀕 (mehr  
 verbrauch), 𐀓𐀔𐀕 e(gegenstaende), 𐀓𐀔𐀕 r𐀓𐀔𐀕 (durchf  
 aehrst), 𐀓𐀔𐀕 e(unterstaende)

### b. 変化語尾を伴う一マス語幹略字

以下にご紹介する一マス略字は、変化語尾、あるいは後綴りを伴う語幹略字である。この点字符号の多くが一マス略字に属しているので、比較のために括弧内にそれを示す。

### 変化語尾を伴う一マス語幹略字

a all(aber), ae(alle), a𐀓𐀔𐀕(allem), ac(allen),  
 a𐀓𐀔𐀕(aller), a𐀓𐀔𐀕(alles), a𐀓𐀔𐀕(allein), acf(allenf  
 alts), a𐀓𐀔𐀕 d𐀓𐀔𐀕 g(allerdings), aessant(allesamt),  
 aem(allemal)  
 𐀓𐀔𐀕 besonder(be), 𐀓𐀔𐀕 e(besondere), 𐀓𐀔𐀕 (besonde

rem), **c**(besonderen), **b**(besonderer), **b**(besonderes), **s**(besonders), **h**(besonderheit), **s**e(insbesondere)

**d**ies(die), **e**(diese), **d**(diesem), **c**(dieser), **d**(dieser), **d**(dieses), **h**(dieserhalb), **m**(diesmal), **m**(diesmalig)

**m**oecht(durch), **e**(moechte), **c**(moechten), **e**(moechtest), **et**(moechtet), **e**(vermoechte), **c**(vermoechten) u wurd(und), ue(wurde), uc(wurden), ue(wurdest), uet(wurdet)

**w**uerd(neber), **e**(wuerde), **c**(wuerden), **e**(wuerdest), **et**(wuerdet), **el**(wuerdelos), **e**(wuerdevoll)

以上の六個のうち五個の一マス語幹略字は、変化語尾、あるいは後綴りを取らなければ、一マス略字を表す点字符号である。**et**も、音節略字 **be** である。こゝに見るようにこれらは、ドイツ語の文章にとつて極めて重要な位置を占める語である。点字符号の機能の重層化は、それだけ略字化すべき語の多さを物語っているのだが、それだけにこの体系をマスターできれば、ドイツ語の点訳書を、自在に読みこなす可能性を指示

じつとそなのどめへへ。

o. "jenig" u "selb"

“jenig” u “selb” は、定冠詞と結合して、前者は「他ならぬその」、後者は「結局同(じ)なり」云々の意味の複合語を作らる。

j jenig, rje(derjenige), **je**(diejenige), dje(dasjenige), rjc(derjenigen), **jc**(diejenigen), **jc**(desjenigen), **jc**(demjenigen) e jc(denjenigen)

s selb, rse(derselbe), **se**(dieselbe) dse(dasselbe) **sc**(derselben) **sc**(demselben) esc(denselben) rs**e**(derselbige) **s**(dieselbige) ds**c**(dasselbigen) **s**(dieselbigen) **c**(densembligen)

以上は、定冠詞とともに複合語を作る語の略字である。これらそのまま単語として理解すればよい。

(“Leitfaden der Blindenvollschrift” und “Kurzscrift” 1973 Blindenstudienanstalt Marburg Lahm)



## 点字から識字までの距離（七二）

### 著作権法改正（中）

#### 山内 薫（墨田区立あずま図書館）

今回の著作権法の改正は大きく以下の三つの柱で構成されている。

（一）インターネット等を活用した著作物利用の円滑化を図るための措置

（二）違法な著作物の流通抑止のための措置

（三）障害者の情報利用の機会の確保のための措置

この（三）が図書館の障害者サービスに係わるのだが、文化庁のホームページでは次のように現行と改正後の違いについて解説している。[http://www.bunka.go.jp/chosakuken/21\\_houkaisei.html](http://www.bunka.go.jp/chosakuken/21_houkaisei.html)

「技術の進展に伴う障害者による著作物等の利用方法の多様化や障害者の権利に関する条約を巡る状況を踏まえ、障害者の情報格差を解消していくことが求められています。

このため、今回の改正では、障害者のために権利者の許諾を得ずに著作物等を利用できる範囲を抜本的に見直すこととしました。改正内容は次のとおりで

す。」として表が掲げられている。表は現行と改正後に分けられそれぞれ次のような解説が付され、特に矢印の後は青い文字で強調されている。

#### ◆視覚障害者関係（第三七条第三項） 障害の種類

（現行）視覚障害者

（改正後）視覚障害者その他視覚による表現の認識に障害のある者

↓発達障害、色覚障害等も対象に

複製等が認められる主体

（現行）点字図書館等の視覚障害者の福祉の増進を目的とする施設（政令指定）

（改正後）視覚障害者等の福祉に関する事業を行う者（政令指定）

↓公共図書館等も指定可能に

認められる行為

（現行）録音図書の作成、録音物の貸出、自動公衆送信

（改正後）視覚障害者等が必要な方式での複製、その複製物の貸出、譲渡、自動公衆送信

↓拡大図書、デジタル図書等の障害者が必要とする方式で作成が可能に

◆聴覚障害者関係（第三七条の二）  
著作物の範囲

（現行）放送、有線放送される著作物

（改正後）聴覚で表現が認識される公表著作物

↓映画も対象に

障害の種類

（現行）聴覚障害者

（改正後）聴覚障害者その他聴覚による表現の認識に

障害のある者

↓発達障害、難聴等も対象に

複製等が認められる主体

（現行）聴覚障害者の福祉の増進を目的とする事業を

行う者（政令指定）

（改正後）聴覚障害者等の福祉に関する事業を行う者

（政令指定）

↓公共図書館等も指定可能に

認められる行為

（現行）字幕のリアルタイムでの自動公衆送信

（改正後）・聴覚障害者等が必要な方式での複製、自

動公衆送信・字幕等を映像に付加して複製・貸出

↓（1）異時の字幕等の送信が可能に（2）手話等の

作成も可能に（3）字幕入映画の貸出が可能に

以上が今回の著作権法改正の（三）障害者の情報利用の機会の確保のための措置についての文化庁の解説だが、この法案成立にあたって、日本図書館協会は文化庁に対し、以下のような要望書を提出した。

（※は山内のコメント）

一 視覚障害者等のための複製等（法第三七条第三項関係）

一・一 法第三七条第三項の「視覚障害者その他視覚による表現の認識に障害のある者」には、知的障害者、精神障害者、学習障害者などのほかに、肢体障害者、寝たきりの人、入院患者なども含めること。

また、外国人などで音声としての日本語は理解できず、外国語は読めない人を含めること。

※実際に録音資料や大きな文字の資料を利用する方は視覚障害者に限らず、以前紹介した学習障害の一つであるディスレクシアの方を始め、広範囲におられることが確認されている。例えばスウェーデンでは精神障害者の方が集中できるとい理由から、音声資料をヘッドホンによって利用した例が報告されているし、墨田区の図書館でも不随意運動のために視点を注視しにくい肢体障害の方が拡大写本を利用したケースがある。また手術後に身体を拘束されていて身動きの取れ

ない方から録音図書の利用希望があったり、学校に行かなかつたために漢字を読むことができない方が録音資料を利用したケースがあった。また、文字からの情報摂取がむずかしい外国人など、こうした人が「視覚による表現の認識に障害がある者」に含まれるかどうかは微妙であり、その判断主体を図書館側に委ねてくれればよいが、障害者手帳交付者等という枠組みをはめられてしまうと、利用できる人の範囲は狭まってしまうだろう。

一・二・同項、「視覚障害者その他視覚による表現の認識に障害のある者の福祉に関する事業を行う者で政令で定めるもの」には、国立国会図書館、公立図書館、学校図書館、大学図書館のほか、公共的な図書館サービスを実施している私立図書館、図書館類縁機関など、一般的に障害者が利用する施設（以下、これらを総称して「図書館」という。）を含めること。

さらに、障害者用資料の製作の現状から、NPO法人やボランティアグループの中で障害者のためにサービス（製作）を行っている機関に対して配慮すること。

※ここでは「政令で定めるもの」がどの範囲までかというところが大きな問題で、国立国会図書館や公立図書館は今のところその範疇に含まれるようだが、学校図

書館以下については微妙な状況だ。おそらくNPO法人やボランティアグループは含まれないだろうと思われる。

一・三・同項、「当該視覚著作物に係る文字を音声にすることその他当該視覚障害者等が利用するために必要な方式」には、音声化のほか、文字の拡大、テキストデータ、リライト、絵図などの立体化、布の絵本化、映像に音声解説を付けるなど、視覚障害者等が使えるあらゆる方法を含めること。

※必要な方式の中には音声化、文字の拡大、テキストデータまでは含まれるだろうが、例えば知的障害の方のために、やさしく、読みやすくリライトすることまで可能かどうかは難しい。北欧などでは、国が補助を出してシェークスピアの作品を読みやすくしたL1ブック（やさしく読める本）を出版しているが、知的障害の方だけではなく日本に在住する日本語を母語としない人などにも読みやすくリライトした本の要望なども勘案する必要があるのではないだろうか。

一・四・同項、「ただし、当該視覚著作物について、著作権者又はその許諾を得た者若しくは第七九条の出版権の設定を受けた者により、当該方式による公衆への提供又は提示が行われている場合は、この限りでない。」に関して、下に掲げた方策等により、現状の障

害者への情報提供体制を下回ったり、限定的なサービスしかできなくなってしまうことがないように配慮すること。

(一) 図書館などが製作を開始した後に、「提供又は提示」がされることのないよう、出版社等に情報開示の指導等を行うこと。

(二) 録音資料においては、視覚障害者などがDAISYと同様の便利さで使えるものを必要としており、視覚障害者の要求を満たさない一般の録音資料は「当該方式」から除外すること。

(三) 価格上の問題で、実質的に購入できなくなったり、購入量が減少したりし、結果として障害者への情報提供が阻害されることのないように、原本となる文字資料の価格と比較して適正な価格となるように指導等を行うこと。

※この条項は、つまり音声資料が公に出版されていたり、原本の大活字資料がすでに出版されているような場合には、当該資料の音声化や拡大等はできないというを言っているのだが、テキストを同梱したマルチメディア・DAISY資料などを必要としている利用者がいた場合には、音声資料が出版されているから作成してはならないということにはならない、というように点を確認している。

## 大滝まさおのブログより

左は、横浜市議の大滝正雄先生が、本誌七十五号（前号）をお読み下さり、そのご感想を自身のblogに表されたものです。お許しをいただいて、転載させていただきます。

2009.08.20 "Thursday"

『横浜漢点字羽化の会』にとって大切な方お二人が相次いで亡くなりました。

羽化の会が発行している機関誌『うか』第75号（09年8月号）には、大切なお二人を失った悲しみと、その存在がいかに大きかったかを、岡田健嗣代表が追悼文を通じて述べておられます。そのお二人とは、安田章さんと、高橋幸子さん。

安田さんは「うか」に永く執筆されていた方で、機関誌づくりにも直接関わるなど、模範的な陰の牽引役を率先して引き受けられた人でした。羽化の会を東京に設立することにも貢献しました。岡田代表は、安田さんを「小生のバリアを壊してくれた」人、と称えています。

高橋さんは、羽化の会の活動が開始された1996

年から、会の活動を支えた人です。もともとカナ点字の点訳活動をされていた高橋さんは、漢点字訳のボランティア募集に応じて、羽化の会の活動に参加。同会が横浜市中央図書館に寄贈した漢点字訳の書籍は、そのほとんどが高橋さんの手により編集されたものです。また漢点字講習会用テキスト等の取りまとめにも尽力。岡田代表は「高橋さんは、師であるばかりでなく、よい友でもあり、同志と呼ばせていただきたい方だった」と、その悼みを表しました。

漢点字普及のため、ひたすら地味な陰の力に徹し、多大な功績を残されて逝った方々に、心からの哀悼の意を捧げたいと思います。

岡田健嗣代表は、高橋幸子さんの追悼文の中で、私のことにもふれてくださっています。その部分を紹介させていただきます。

「横濱漢点字羽化の会の活動は1996年に始まったが、次の97年には、横浜国大の村田忠禧先生と横浜市議の大滝正雄先生のご尽力で、『漢字源』（藤堂明保編、学習研究社）の漢点字版・全90巻を完成させて、横浜市中央図書館に納入することが出来た。その後毎年、漢点字訳書を1、2タイトル納入している。」

## 「東京漢点字羽化の会」例会報告と

わたくしごと

木村 多恵子



第45回例会 2009年8月12日（水）13:30

15:30、ヒューマンプラザ第1会議室

今回も「漢文の読み方」についての解説をしてもらい、題名の付け方、ルビの付け方、など丁寧に行った。

メールの、とくに添付ファイルがつくと木村の所へはエラーが生じるので、その原因を探した。

「漢文の読み方」をとにかく入力し、お互いに校正までやってくることにした。

岡田さんのテキストを急いで入力する。

第46回例会 2009年9月9日（水）13:30

15:30、ヒューマンプラザ第1会議室

「羽化」75号を8月22日の学習会のお配りした。

学習会用テキスト四巻の点字と、墨字を準備するこ

と。点字は横浜の羽化の会の方が準備してください、墨字版は中田さんが用意してください。墨字のほうはガイドヘルパーの方が必ずしも一定していないので、余裕をもって作っていた。12月はお部屋の予約が難しそうなので、早めに12月の集会日も決めた。

「博物館」の入力の方法について丁寧に行った。

### \* 予告

10月の例会(第47回) 2009年10月7日(水)

13..30~15..30、7階第一会議室

第31回学習会 2009年10月17日(第3土曜)

18..30~20..30 7階第一会議室

11月の例会(第48回) 2009年11月11日(水)

13..30~15..30、7階第二会議室

第32回学習会 2009年11月21日(第3土曜)

18..30~20..30、7階第一会議室

12月の例会(第49回) 2009年12月9日(水)

13..30~15..30、7階集会室(畳の部屋)

第33回学習会 2009年12月19日(第3土曜日)

17..30~20..30

ヒューマンプラザ7階第一会議室

## わたくしごと

石井和子(TBSアナウンサー・気象予報士)著  
『平安の気象予報士 紫式部』、『源氏物語』に隠された天気科学』(講談社)という本を見つけ、そのタイトルに魅せられて読み始めた。

わたし流の理解ではあるが、かなり昔から『源氏物語』には興味を持っていたので、気象学的な見方とはどんなものかと、このタイトルが気になったからである。

高校の国語の教科書に『源氏物語』のごく一部、〈桐壺〉のはじめや〈須磨・明石〉など載っていたのを読んだのが最初である。国語の教師が、その一部から派生してかなり物語の内容を熱く語ってくれました。この教師もこの物語が好きだったのだと思う。現代文の単元のとときは違った熱の入れようだったので、わたしにもその情熱が移ってきました。その証拠に、もう少し内容を読み取りたいと思い、墨字の、俗にいう、「虎の巻」を、読みたい巻に合わせて何冊か買ってきた。これらの本を買いに連れて行き、本を選ぶのを手伝ってくれたのは姉である。そして実際に少しでも読んでくれようとしたが、残念ながら彼女は家事そ

の他の仕事が忙しく、やっとなつたとわたしと相対したときは、姉はすっかり疲れ果てて、込み入ったものを読んでも追えたら？との思いから、わたしは『谷崎源氏』

(テープ)、『与謝野源氏』、『円地源氏』などの現代語訳本をテープと点字で長い年月をかけて読んだ。人物の関係を覚えるのがなかなか難しかったり、宮中の組織やそれぞれの官職の仕事内容など覚えられなかった。けれども、主人公光源氏と登場人物との関わりが少しずつ分かるようになると、多少なりともその巻巻に出てくる人物の心理的葛藤を推測できるようになった。しかしそれは当然ながらまだまだまったくの表面上のことであり、単に筋立てを追っているにすぎなかったことが、次に読んだ、村山リウの「わたしの『源氏物語』」(テープ)で分かった。

この本は単なる現代語訳だけではなく、一人ひとりの心理描写を丁寧に描き出し、時代背景や平安時代の生活習慣、文化についての解説が書かれていた。たとえば家事の分野で、衣裳の色目合わせから染色、織物、裁縫、お香の作り方、料理、また、教育については、手習い、息子と娘の教育法の違いからはじまって、政治経済、家作り、造園などあらゆる分野にわた

って、物語にそってより分かりやすい解説が書かれていた。

筋だけを追っていたのでは恋愛物語だけに終わってしまう。けれども、実際に深く読めば読むほど人間の生き方を追求していることが分かる。とくに女の生き方、問題が生じたときの身の処し方など、現代のわたしたちにも示唆を与えていると思う。人間の感情の本質は今も昔も変わらないであろう。当時の人びとの悲しみは当然のごとく今のわたしたちの悲しみであり、悲しみをもたらす本質も根元的には同じなのだと思

う。  
前置きが長くなってしまったけれど、そんなこんなでわたしは『源氏物語』には興味を持ち続けてきた。ところがこの石井和子の、『平安の気象予報士 紫式部』(『源氏物語』に隠された天気学の科学) (2002年11月)は、これまでわたしが知っているものとは、物語に対する見方がまるで違っているように思えた。なお、この本を漢点訳してくださいの方は、もう既に逝かれ、新たに漢点訳していただけないのが残念である。

昔から言われているように、紫式部は、物語の登場人物の心理と情景とが響き合うように、雪や雨、野

分、また虫の音などの風景描写を美しく描いている。従って、石井和子さんが気象に関することがらをどう教えてくれるのか楽しみでこの本を開いた。

まえがきを読み、第1章「源氏物語」を生んだ平安時代の気候」を読み始めて、わたしは途端に平安時代よりさらに古い時代へと想いを凝らすことになった。

「古気候を探る」との表題で、「過去の気候を研究する学問を古気候学といい、平安時代、つまり『源氏物語』が書かれた時代の気象に関する見方もこの古気候の分野に入るのだという。そして古気候を探るために、大きく九つの方法が上げられていた。

\* 以下1～9の項目は著者石井和子さんの原本から、勝手ながらわたしが省略して引用させていたたく。

1. 古文書を調べる―『日本書紀』や『三代実録』などから天気の記事を参考にする（琵琶湖などの湖や山の氷の状態、水位、桜の開花時期、農作物のでき具合）をみる

2. 木の年輪を調べる―木は、気候のいい年は、よ

り成長するため、年輪の幅が広くなる。ヨーロッパやアメリカでは、この方法で、ドイツでは9世紀ころまで、カリフォルニアの古木ではBC3000年くらい前の気候も分かる。日本ではせいぜい屋久杉の千年程度なので、法隆寺などに使われている、伐採後の柱などから推定する。

3. 花粉を分析する―湖底の泥を柱状に採って、年別に泥層に含まれている花粉の化石を調べる。（この方法では細かい変動は分からない）

4. 湖底にたまった泥の層状構造を調べる―川から流れ込んだ泥が沈澱する。雨の多いときは沈澱が厚くなる。

5. 高山の万年雪の層状構造を調べる―乾季には塵などが積もり、万年雪の年輪となる。

6. 酸素（O<sub>2</sub>）の同位元素の割合を調べる―ユーリが開発した方法で、グリーンランドの氷柱を調査し、西暦800年ころまでの水温が推定されている。

7. 炭素（CO<sub>2</sub>）の同位元素・原子量12と原子量14の割合を調べる―地中に埋まっている植物が死んだ時期の太陽の活動状態が推定できる。

8. 氷河や変化した海岸線の位置から推定する―岩



石でわかる氷河運動の痕跡などから、ヨーロッパでは、古代ローマ時代のころに氷河が後退しており、この時代が温暖であったこと、さらに、BC8〜5世紀には前進していて、気候が寒冷化に向かったことなどが知られている。また、海岸線の変化は海面の上昇と密接に関係している。地球温暖化で極大陸の雪や氷が溶けたり、海水が膨張したりする。ちなみに『源氏物語』の書かれたころは、今よりも大阪湾が深く入りこんで京都の南部近くまで内湾化していた。

9. 太陽の黒点数を調べる―太陽活動は黒点の多いときほど活発で、莫大なエネルギーを放出するフレア（黒点の上空領域で起こる爆発現象）も活発となる。ガリレオが発見して以来、約300年、黒点数はおよそ11年周期で増減することもわかっている。

わたしは、『源氏物語』の世界に入る前に、琵琶湖の湖底の泥をかき混ぜないように、細心の注意を払いながら、泥の塊？（ヘドロであろうか？）を採り出す仕事をしている人びとの激しい労働の様子を想像し、また、その採取された泥を実際に目の前に置いて、ためつすがめつ見つめている人たちが泥の、重なり具合、塊の中にどんなものが含まれているか、緊張しな

がら調べている人の様子（ちよつと気むずかしい顔、ニコニコしている顔）まで想像してしまう。わたしは、この本の冒頭から興味をそそられて、まだ先に進めないのである。じつくりと楽しませていただきたいと思っている。

最期に『源氏物語』の「野分」の巻の中から、夕霧が六条院の女君たちを垣間見する場面など、四首のみ記す。

おほかたのをぎの葉すぐる風の音も

うき身ひとつにしむ心ちして

風さわぎむら雲まがふ夕べにも

わするの間なく忘れぬ君

吹きみだる風のけしきにを女郎花

しをれしむべき心地こそすれ

下露になびかましかばを女郎花

あらし風にはしをれざらまし

（大塚ひかり 全訳

ちくま文庫 2009年3月）

2009年10月1日

# 東京漢点字 学習会報告

## 平成21年度 第4回 (第28回) 報告

- 1 日時 平成21年7月11日 (土) 18時30分～20時30分
  - 2 場所 ヒューマンプラザ7階 第1会議室
  - 3 出席者 (省略)
  - 4 使用教材 「漢点字講習用テキスト 初級編 第三回 (全十回) 一点字編、墨字編
  - 5 学習内容
    - (1) 連絡事項
      - ・朝日新聞より漢点字について問い合わせがあった。(後日横浜で、取材を受けた。)
    - (2) 前回の復習
      - 「応<sup>●●●●</sup>」
      - \* 系<sup>●●●●</sup> (ケイ<sup>●●●●</sup>・2・3の点) をパーツとして含む文字
      - 「係<sup>●●●●</sup>」、  
「孫<sup>●●●●</sup>」
    - 3 複合文字 (1)
- 漢数字および第1基本文字を部首とした文字 (7)
- 109 泳<sup>●●●●</sup>、110 混<sup>●●●●</sup>、111 財<sup>●●●●</sup>

### (3) 今回の学習内容

テキスト第三回、複合文字 (1)

112 「社<sup>●●●●</sup>」示偏 (ネ<sup>●●●●</sup>・1・2・3・4の点) と土 (ツ<sup>●●●●</sup>・1・3・4・5の点) で表す。字式は示十土。土は土を盛った祭壇の意。人が集まって作る組織や集団を指す。音読みはシヤ、訓読みはやしろ。

113 「証<sup>●●●●</sup>」言偏 (エ下がり<sup>●●●●</sup>・1・2・4の点) と正<sup>●●●●</sup>の右のイ (1・2の点) で表す。字式は言十正。事実をありのままに申し立てること。本来の字は言偏十登。音読みはショウ、セイ、訓読みはあかす、あかし

114 「徒<sup>●●●●</sup>」行人偏 (ユ<sup>●●●●</sup>・3・4・6の点) と走 (ハ<sup>●●●●</sup>・1・3・6の点) で表す。字式はイ十走。かちとは歩いていくこと。何も使わずに行くこと。いたずらにと読んで空しい行為、成果の上がらない行為の意。音読みはト、訓読みはかち、いたずら<sup>●●●●</sup>に。

115 「道<sup>●●●●</sup>」 しんによう (ヒ<sup>●●●●</sup>・1・2・3・6の点) と首<sup>●●●●</sup> (4の点) で表す。字式はしんによう十首。しんにはものはもの動く様子を表す。首は自分の集団の外の敵の首を切り落として魔除けに用いたもの。音読みはドウ、トウ、訓読みはみち。

116 「貧<sup>●●●●</sup>」分 (リ<sup>●●●●</sup>・1・2・5の点) の下に貝 (オ下がり<sup>●●●●</sup>・3・5の点) で表す。字式は分／

貝。貝は財産を表し、みんなに分け与えて乏しくなるの意。才能や学問の乏しい様子も表す。音読みはヒン、ピン、訓読みはまず、しい。(中田利夫)

## 平成21年度 第5回 (第29回) 報告

1 日時 平成21年8月22日(土)

18時30分～20時30分

2 場所 ヒューマンプラザ7階 第1会議室

今月は全体として出席者が少なかったので、木村が報告をさせていただく。

いつものように前月7月に学習した文字(財、証、徒、道、貧)を復習した。

新しい文字は、「防」「明」「庫」「連」「更」である。

「防」は「こぎと偏」の右側に「方」を置いた文字で、「方」は、左右に張り出した形で、襲ってくる敵や、氾濫する水をせき止める意味を表している。「こぎと偏」は、土を盛った形を象っていて、これも「方」と同じ意味である。

用例としては、防衛、防御、防火用水、堤防、予防  
接種

「明」は「メイ、ミヨウ、ミン、あかり、あからむ、あかい、あける、あきらか

ではなく、窓を象つたもので、夜、窓から月の光がさして、部屋の中が明るく照らし出される様子を表す文字で、訓読みの「あかるい、あからむ」は、文字通り光りに照らされて明るくなることを表している。「あける」は、夜が明ける、年が明ける、意味である。

「あきらか」も、光に照らされて、よく見えることを意味する。明るい、はっきりしている、道理がよく分かっている、ものを見分ける力があるなどの意味がある。音読みの「ミン」は、中国の王朝の名称である。

用例は、明瞭、明白、明快、明敏、明晰、明日、賢明、未明、文明

「庫」は「コ、ク、くら

「麻垂れ」の下に「車」を置いた形の文字で、「麻垂れ」は建物と屋根と壁を象っていて、「車」は戦車を表している。戦車を保管する建物がこの文字の意味で、そこから、いろいろなものを保管しておく「くら」として用いる。「庫裏(くり)」とは、寺の台所の意味である。

用例は庫裏、車庫、書庫、冷蔵庫

「連」は「レン、つら、なる、つら、ねる、つ、れ

る、つれ

「車」に「しんしよう」を加えた形の文字で、車が連なつて行く様子を表している。列を連ねて行く、転じて関わり合いになる、「連れる」と読んで人を連れて歩く、連れを伴つて行く、そこからさらに、友とか仲間の意味に派生した。

用例として、連行、連動、連座、国際連合、「歌は世に連れ、世は歌に連れ」

「更<sup>●●●●</sup>」<sup>●●●●</sup>「コウ、キョウ、さらに、ふける、ふかす、あらためる、かえる、かわる

横線の下に「日」、横線の中央から「日」の中央を通つて縦線があり、下で右斜め線と「人」の字形に交差させた形の文字である。「人」の字形の右斜め線は、左上に少し交差して出る。「人」の形は、足を開いて突つ張る形で、緩んだものを引き締めることを表す。「さらに」と読んで、一段と、その上に、の意味に、あるいは「さらに：なし」と打ち消しを伴う使い方をする。「あらためる・かえる」と読んで、物事のあり方を変える、順序を変える、引き締めるの意味、「ふける」と読んで経験を積む、夜がふけるとい意味に用いられる。

用例として、更改、更新、更迭、更衣室、更正、更生、衣更え、更け行く秋の夜（木村多恵子）

## 「報告と」案内

### 一 漢点字訳書二タイトル

二つの漢点字訳書が完成します。このあとのページに短くご紹介致しましたので、ご精読下さい。

#### ①『漱石の漢詩を読む』…

著者・古井由吉、発行所・岩波書店

夏目漱石と言えば、我が国近代文学の最高峰です。漱石の筆名は、「石に漱ぎ流れに枕す」から取った俳号だという有名な逸話があるように、漢詩や俳句に多くの秀作を遺しています。著者の古井由吉氏は、ドイツ文学、とりわけムージルの研究者としても知られている作家です。その古井氏が漱石の漢詩を読み解くというのが、この書物の目論見です。

私たちは、漱石の小説は読みます、それも古典として。しかし研究者でもない限り、全集にしか載っていない漢詩にまで、興味を伸ばすことはあまりありません。しかも漢詩の世界は、視覚障害者にとっては未知の領域であり、閉ざされた領域でもあります。

古井氏が漱石の漢詩を読む、これだけでも大変スリリングな試みです。漢点字を使うことで、視覚障害者にもその試みにコミットする機会が開かれました。

この書物を読むためだけに漢点字を学んだとして



も、決して損のない本です。

## ② 『のんちゃんホッチ・ポッチ』…

著者・生田典子、発行所・芸芸社

《この本のタイトルに使った“Hotch-Potch”（ホッチポッチ）という言葉は、1958年の夏休みを英国で過ごした時、初めて耳にした言葉でした。ひと夏ホームステイをさせていただいた家では、「今日“Hotch-Potch”よ」と毎日のように野菜や肉のごった煮を作ってくれました。シチューのようでもありましたが、もう少し野性的な感じがしたものでした。それがまた私には心地よく飽きずに食べたものです。この本を読んでくださる方も、このごった煮が気に入ってくださったら嬉しいですよ。》（前書きより）

生田さんは岡田の古い知人です。同書は最新の著作で、若い女性に読んでいただきたいとおっしゃっておられます。

## 二 点字雑誌『点字公明』の

### 取材を受けました

公明党の点字の機関誌『点字公明』様から、漢点字とその活動を記事にして掲載したいというお申し出がありました。九月二三日に、取材をお受け致しました。同誌十一月号に掲載される予定です。

点字誌で漢点字が取り上げられるのは、稀有なこと

です。反響を期待したいと思います。

同記事は、本誌次号に転載させていただく予定です。お待ち下さい。

### 漢点字訳書紹介

#### ① 『漱石の漢詩を読む』

左は、『漱石の漢詩を読む』に、著者の古井由吉氏が記された前書きの後半部です。

前口上 漱石の独立峰

（前略）

日本語の精妙さ

それともう一つ、なぜ漢文漢詩にこだわるかといえますと、日本という国は単一民族であって単一の言語だ、と言われる。多くの国がバイリンガルであって、いま国際化の時代に入り、バイリンガルの強みを發揮しています。日本は単一言語のために、なかなか外国語を話すことに習熟しない、といわれている。しかしもう少し深く取ると、日本国こそバイリンガルだ、ともいえるのです。古来。一方に和文がある。そして他方に漢文があり、そして漢字漢語にたよる文章があります。漢字とは外国の文字です。これをいちいち和文、和語に変換しながら、われわれは生活を営んでい

るわけです。何も漢文漢詩を読まなくとも、普通にパンフレットを読んでいても漢字がいつぱいある。意識もせずによつていますが、実は脳の中のどこかに、言葉を変換する中枢があつて、それを常に働かせているわけです。

しかも、漢字には一字の内にいろいろな意味が総合されている。われわれは読み取るために、そこから一つの意味を分析して引き出してくる。これは翻訳です。それを常にやつてきているのです。そうやつて日本語という言語が成り立ってきた。これを忘れると日本語は失われるかもしれない。日本語とは、そういう二重言語です。そういう意味での二重言語に拠る日本文化とは、特異な文化なのです。

例えば「漢文」というものがあるということを、われわれは不思議とも思わない。ところが欧米人に、こういうものがあるということをつぶさに説明するとします。これは難しい。なぜなら、われわれが読む漢文というのは中国語です。しかも、古中国語、古典中国語です。日本語と言語の系統がまるで違う。文法のことを英語でグラマーといいます。文章構造のことをシンタックスといいます。そのグラマーとシンタックスが、日本語と中国語とはまるで違う。翻訳して読むより他にない。ところが、原文のままポイントとか、一、二、三点を付けて読んでしまう。このことは、例えばヨーロッパ人にいくら説明しても分からない。そ

んなことはいったい可能なかと不可議がる。

ところが、それに類したことを、われわれの頭脳は四六時中やつているわけです。そこに日本の言語の豊かさもある。しかしまた、危機をつねにはらんでもいる。変換したり翻訳する、これには相当な精神のエネルギーがいる。だからまさかの場合、危急の場面に出会つて、人の活力が散乱なり低下したりする時、日本語は、言葉を把握する力を失つてしまうおそれがある。変換や翻訳を積み重ねてはじめて意味をつかむものだからです。あるいは、世の中がひどく変わったとき、言語が対応の關係を見失つて解体する恐れがある。ヨーロッパや中国の言葉も、長い歴史を重ねて、精妙なものでありますが、日本語の精妙さには、さらに複雑な事情がある。日本の今の世の中は、どうも自分の言語の、日本語のそういう微妙なところを忘れてきているのではないか。

そこで漢文漢詩を読んで、まず驚くことは、少し習熟するとこれが読めるということ。なぜ、これが読めるんだらう、と現代の人間は考えてしまいます。しかしよく考えると、普段からわれわれは頭の中です。それをやっているのです、普通の文章を読む時にも。そこでも、漢文漢詩を中国の古典として読むことも大事だけれども、日本語として、古くから伝えられた日本語として読むことも、そうして日本語を振り返ることも大事だと思います。

② 『のんちゃんのおツチ・ポツチ』

左は、「のんちゃんのおツチ・ポツチ」（生  
田典子著）の抜粋です。

3 言葉って何だろうー言葉とは

リカちゃん（幼稚園児）

リカちゃん のんちゃん、英語ペラペラ？

のんちゃん ペラペラとはしゃべらないけど、自分の考えを言うことはできると思うわ。のんちゃんは、ペラペラしゃべるっていう言い方は好きじゃないんだあ。

リカちゃん どういうのが好きなの？

のんちゃん そうねえ、自分の思っていることをどんなふうに言ったら聞いている人が分かってくれるかな、と違ってしゃべるのがいいと思うわ。ペラペラっていう言い方は、なんだか聞いている人のことを考えないでしゃべっている感じがするのね。

リカちゃん ふーん。リカもゆっくりしゃべる。

のんちゃん 早くしゃべってもいいけれど、聞いている人が分からないと暗号になっちゃうでしょ？

リカちゃん うん。「言葉」っておもしろいね。のんちゃん ねえ、これから二人で「言葉」をつ

くらない？たとえば、「おながすいた」と言うのを

「ホカホカヘイ」というとか、痛いを「タイタイ」とか、ありがたうを「クンクン」とか二人だけに通じる「言葉」をつくらない？

リカちゃん おもしろそう。じゃあ、食べたいを「ベタベタ」、クッキーを「シイシイ」、はいそうですを「ウシウシ」に決めよう。

のんちゃん じゃあ始めます。リカちゃん、「ホ

カホカヘイ？」

リカちゃん 「ウシウシ」

のんちゃん 「シイシイ」を「ベタベタ？」

リカちゃん 「クンクン」。ああ、おいしかった

あ！

のんちゃん、言葉っておもしろいね。自分たちで決まりをつくれればいいんだあ。

のんちゃん リカちゃん、すごい。言葉の意味がわかったので、すごい。

リカちゃん 「クンクン」。わーい、おもしろいなあ。

言葉とは何か

幼稚園児のリカちゃんと二人で過ごした時のことだ。彼女は「言葉」に興味があるらしい。英語ができることがすごいことだと思ってもいるらしかった。

（以下略）

女媧じよか（二）

女媧じよか 練リテ 五色リソ 石ヲ 以テ 補ヒ 天ヲ 闕ケタルヲ 断チテ 鼇ノ 之ヲ 足ヲ 以テ 立ツ 四極ヲ。其ノ 後、 共工ノ 与ニ 顓頊ノ 争ヒ 為レ 帝ト 怒リテ 而レ 触レ 不周ノ 山ニ 折リ 天柱ヲ 絶ツ 地維ヲ 故ニ 天ハ 傾キ 西北ニ 日月ヲ 星辰ヲ 就キ 焉ニ 地ハ 不レ 滿タ 東南ニ 故ニ 百川ヲ 水ヲ 潦ス 歸レ 焉ニ。

女媧は、人類を作ったとされる創造の女神。共工と顓頊（せんぎよく）はともに伝説上の神。

西北に高い山がそびえ、東南は低く海につながる世界（中国）の地形の由来を説く、豪快な神話です。

女媧じよか 五色ノ 石ヲ を練リテ 以テ 天ノ 闕カ けたる

を補ヒ い、鼇ノ の足ヲ を断チテ 以テ 四極ヲ を立

つ。其ノ 後、 共工ノ 顓頊ト と帝ト を為ス るを争ヒ、

怒リテ 不周ノ 山ニ 触レ、天柱ヲ を折リ、地維ヲ

を絶ツ。故ニ 天ハ 西北ニ 傾キ、日月ヲ 星辰ヲ

焉ニ に就ツ き、地ハ 東南ニ 満タ ず、故ニ 百川ノ

水潦ヲ 焉ニ に歸ス。

太古、女媧は、様々な鉱石を溶かして天の不完全な部分を補修し、（蓬莱山をも背負うという）大海亀の足を切り、天の四方を支える柱を立てた。その後、顓頊と帝位を争った共工は、怒って不周山（西の果てにあるとされる崑崙山脈）に頭をぶちあてて、天の支柱を折り、大地をつなぎ止めている綱を切ってしまった。天は西北に傾いて、太陽と月と星は西北に落ちてゆき、大地は東南の方があいて、川はみなその東南のへ流れるようになった。

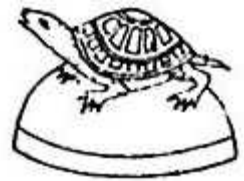




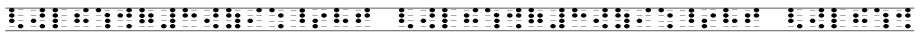
女 じよか

女 練 リテ 五 色 ノ 石 ヲ 以 テ  
 補 ヒ 天 ノ 闕 ケタルヲ、 断 チ  
 テ 鼈 之 足 ヲ 以 テ 立 ツ 四 極  
 ヲ。 其 ノ 後、 共 工 与 争  
 ヒ 為 ルヲ 帝 ト、 怒 リテ 而 触  
 レ 不 周 ノ 山 ニ、 折 リ 天 柱  
 ヲ、 絶 ツ 地 維 ヲ。 故 ニ 天  
 ハ 傾 キ 西 北 ニ、 日 月 星 辰 就 キ  
 焉 ニ、 地 ハ 不 満 タ 東 南  
 ニ、 故 ニ 百 川 ノ 水 潦 帰 ス 焉  
 ニ。

女媧（じよか）の媧（𪛗）、  
 顓頊（せんぎょく）の顓（𪛗）と  
 頊（𪛗）は、JIS(第2水準以下)  
 にない漢字です。返り点とJISにない  
 漢字は、点字符号で入れてあります。



参照図書：岩波ジュニア新書『漢文の読み方』（奥平卓）



# 漢点字講習用テキスト

## 初級編 第17回

### 3 複合文字 (1)

#### 6. 漢数字および第一基本文字を部首とした文字 (6)

※「由」(𠃉)、「曲」(𠃊)を部首として含む文字一つずつ。

(103) 油(𠃉) ユ ユウ あぶら

「さんずい」の右側に「由」(𠃉)を置いた形の文字です。「由」(𠃉)は、口の細い壺を象った文字で、「油」(𠃉)は、その口からたらたらと流れ出す液体を表しています。たらたらと流れ出すことから、液体の「あぶら」の意味に用いられるようになりました。漢点字では、「𠃉」(由)と「𠃊」(さんずい)で表されます。左右が逆になって、さらに第二さんずいを採用しました。

「油田」「油井」「油脂」「油性塗料」「石油」「醤油」「機械油」「椿油」「鬢付け油」

(104) 典(𠃊) テン のり

「曲」(𠃊)の下に「八」(𠃋)を置いた形の文字です。「曲」(𠃊)の形は、古代の中国で作られていた竹簡を束ねた書物を象っていて、分厚い、重厚な書物を意味しています。下の「八」(𠃋)の形は、その書物を載せている台です。古典の教え、基準となる原則を表す文字です。漢点字では、「𠃊」(曲)と「𠃋」(八)で表されます。

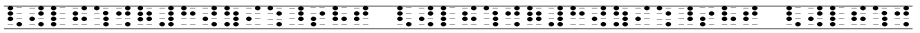
「典型」「典拠」「辞典」「式典」「楽典」

※「心」(𠃌)が下に付く文字二つ。

\*これまでに、「想」(𠃌)・恋(𠃌)・思(𠃌)」と、「心」(𠃌)が下に付く文字が三つ出て来ました。このように下に付く「心」(𠃌)を、「下心」と呼びます。立心偏と同様に、心の働きを表す文字です。

(105) 𠃌(𠃌) アク オ わる-い にく-む わる

「𠃌」(𠃌)の下に「心」(𠃌)が置かれた形の文字です。「𠃌」(𠃌)は、下に押し下げられた形を表していて、ここでは「心」(𠃌)を押しえつけられ



た形、欲求不満な気持ちを表す文字です。そこから「わるい、にくむ」という意味が生じました。また、漢文を読み下した場合、「いづくにか」と読んで、「どこに？」と疑問の副詞に、「いづくんぞ」と読んで、「どうして？」と、反問の副詞に解します。漢点字では、「𠄎 (垂)」と「𠄎 (心)」で表されます。

「悪人」「悪意」「悪心」「悪事」「悪行」「險悪」「好悪」「嫌悪」「憎悪」「悪者」「悪さ」「意地悪」

(106) 応𠄎𠄎 オウ こた - える

「𠄎」の下に「心𠄎」が置かれた形の文字です。胸でしっかり受け止める形を表していると言われます。相手の働きかけを受け止めて、それに応えること、求めに応じること、また、手応えがある、ある行為に対しての報いが来るという意味もあります。漢文を読み下した場合、「まさに…すべし」と読んで、当然…すべきである、…であるはずだと解されます。漢点字では、「𠄎 (𠄎)」と「𠄎 (心)」で表されます。

\*この文字は、熟語をなすとき、前の語が撥音(ん)で終わる場合、音が「ノウ」となります。

「応答」「応対」「応接」「応諾」「応援」「応募」「応分」「応報」「応用化学」「応急手当」「対応」「反応」「感応」「手応え」

※「系𠄎」を部首として含む文字二つ。

(107) 係𠄎𠄎 ケイ かか - る かかり

「人𠄎偏」の右側に「系𠄎」を置いた形の文字です。「系𠄎」と同様、ものごとが繋がる意味、人の繋がり、関わりの意味を表します。また、「かかり」と読んで、ある仕事の担当者を指します。漢点字では、「𠄎 (人偏)」と「𠄎 (系)」で表されます。

「係争」「係数」「関係」「係助詞」「係長」「庶務係」

(108) 孫𠄎𠄎 ソン まご

「子𠄎」の右側に「系𠄎」を置いた形の文字です。血の繋がった子孫を意味しますが、一般には二代下った子孫を言います。部首の「系𠄎」は、その繋がりを表しています。漢点字では、「𠄎 (子)」と「𠄎 (系)」で表されます。

「子孫」「曾孫」

## 編集後記

民主党の新政権が発足し、その「マニフェスト」が着々と実行されつつあります。筋

としては正しいのですが、ハツ場（やんば）ダムの強制的計画中止など、はたから見てもかなり非現実的な政策が強行されようとしています。一見大衆受けはするけれども、実際上は予算の裏付けのない各種のマニフェストの約束がそのまま実行されると、結果として日本経済の致命的な崩壊につながるのではないかと、恐ろしさが脳裏をかすめます。

障害者関連法などの合理的な見直しがなされるのなら大賛成ですが、実際のところはどうかなるのか、ただハラハラしながら見守って行くしか芸はなさそうです。

点字プリンターの故障については、何とかそれを直してくれそうなメーカーが見つかり、早速送り出しました。無事故障が直ってくることを祈っています。

今回、編集上の都合により「見果てぬ夢を」はお休みします。

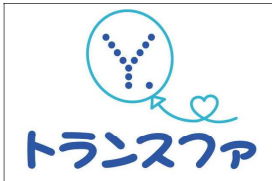
（木下 和久）

## （有）横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー：資格・ホームヘルパー2級以上、および視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要：上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。



〒231-0063横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1104

電話： 045-263-0306

FAX： 045-263-0316

E-MAIL（岡田健嗣）： okada\_tr\_eib@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL：http://ukanokai.web.infoseek.co.jp

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は12月15日です。

※本誌（活字版・テープ版・ディスク版）の無断転載は固くお断りします。